「自然的態度の構成的現象学」の視座 ——シュッツ社会理論の二つの系——

The 'Constitutive Phenomenology of Natural Attitude' and Two Lines in the Schutz's Social Theory

矢田部 圭介

YATABE Keisuke

'Constitutive Phenomenology of Natural Attitude' would be one of the most appropriate terms for describing the ground of Alfred Schutz's Social Theory. The aim of this paper is to realize his social theory from the view of this Constitutive Phenomenology of Natural Attitude. Then, we at first contrast this attitude with Husserl's Phenomenology. In this part, we can find two different spheres of this attitude; mundane and transcendental. Second, the problem of how these two spheres are embodied in Schutz's social theory, is examined, and two lines of his social theory, description of typified world and analysis of typifying, are demonstrated. In the end of this paper, two concepts, called working and relevance system, are discussed as a principal insight of Schutz's social theory based on Constitutive Phenomenology of Natural Attitude.

0. 序

シュッツの社会理論を論じる際に、必ず論及されるいくつかの項目がある。曰く、他者理解、生活世界、多元的現実、我々関係、レリヴァンス、社会科学のための三つの公準、などなど。しかし、シュッツの社会理論の立場を端的にあらわし、それを全体として特徴づけるためには、これらのうちのどの項目も、おそらく狭すぎるだろう。そして、自然的態度の構成的現象学という語は、まさにそのためのもののように思われるのである。

実のところ、シュッツが、「自然的態度の構成的現象学」という語をもって、自身の立場について直接に語ることはそれほど多いわけではない。というのも、シュッツがこの呼び名を直接用いるのは、(フッサールの)現象学との関連において、自身の社会理論および社会科学一般を定位する際にほとんど限られているからである⁽¹⁾。にもかかわらず、この自然的態度の構成的現象学というのは、シュッツの社会理論の特徴をもっともよく示す呼び名であるといえるであろう。この語が、シュッツの最初期の著作においてすでに現れており(Schutz[1932=1982])、また晩年の論文のなかにもみることができる(Schutz[1959=1983])ことから示唆されるように、自然的態度の構成的現象学という立場は、シュッツの社会理論の全体に通底していると思われる。

本稿での試みは、自然的態度の構成的現象学という立場との関わりで、シュッツの社会理論の編成を理解することである。逆の言い方をすれば、シュッツの社会理論の根底に自然的態度の構成的現象学という立場を読みとっていくことである。シュッツの社会理論のなかで、自然的態度の構成的現象学という立場は、どのように生きているのだろうか。こうした問いに応えることは、おそらく、シュッツの社会理論をある仕方でも読み直し、編成しなおすことにも通じていよう。

シュッツの自然的態度の構成的現象学という立場は、先にも触れたように、直接にはフッサールの超越論的現象学との対比のうちにその根をもっている。それゆえ、本稿では、まず第1章において、フッサールとの関連で、シュッツの「自然的態度の構成的現象学」という立場を定位することからはじめる。このことは同時に、このシュッツの立場が、その由来からして必然的に内包している二つの位相を確認することにもなるはずである。こうした準備作業を経て、第2章以下では、自然的態度の構成的現象学という立場に基づいたシュッツの社会理論の論理構成を追うことになる。第2章では、第1章で確認された二重の位相が具体的にシュッツの理論構成のなかでどのように顕現しているのかを示す。そして第3章では、こうした社会理論のなかにみられる、シュッツの自然的態度の構成的現象学の根幹的な洞察として、ワーキングおよび関連性の体系について論じることにはしたい。

1. 自然的態度の構成的現象学の二つの位相

本章では、シュッツのいう自然的態度の構成的現象学とフッサールの現象学との関連を論じ、併せてシュッツの立場が内包する二つの位相を提示する。ただし、このシュッツとフッサールの関連という問題は、正直のところ筆者の手に余る大問題であるので、ここでは吉沢による非常に明瞭な先行研究に多くを頼りながら論を進めたい⁽²⁾。

さて、筆者の知る限り、自然的態度の構成的現象学という語をシュッツが用いた最初の例は、『社会的世界の意味構成』の第1章末尾である(Schutz[1932=1982:60])。この部分でシュッツは、第2章で行われる内的時間意識に関する超越論的な分析が、第3章以下の社会的世界の分析においても有効であるということ、また逆にある種の超越論的分析が社会的世界の分析にとって必要であるということを強調している。「内的時間意識の分析結果を日常的な社会生活の領域に適用する場合でも、私たちはこれを何ら変える必要はない。つづいて私たちは・・・超越論的主観性と超越論の間主観性の問題については意識的に断念しつつ、『現象学的心理学』を追求する」(Schutz[1932=1982:60])。そして、シュッツが、フッサールをひきつつ述べるところによれば、この現象学的心理学こそ自然的態度の構成的現象学にはかならない。つまり、ここでシュッツのいう自然的態度の構成的現象学とは、超越論的な分析をふまえた上での社会的世界の分析のことである。

それゆえ、シュッツの自然的態度の構成的現象学という立場は、その端緒から二つの位相を内包していたということができよう。吉沢にしたがえば、この二つの位相とは超越論的なレヴェルと内世界的なレヴェルということになる(吉沢[1982:134],[1984:132])。ここでいう超越論的な位相とは、シュッツが「超越論的主体に焦点を合わせ」(吉沢[1984:132])、その「内的時間意識の流れの本質構造の解明」(吉沢[1982:134],[1984:132])を試みているレヴェルである。これに対し、シュッツにおける内世界的な位相とは、「他者存在を自明とし相互行為を行いながら自然的態度のうちに生きる実践的主体を対象とする記述」(吉沢[1984:132])であり、そうした意味での「生活世界の存在論」(吉沢[1982:137])というべきレヴェルである。

吉沢によれば、シュッツが自然的態度の構成的現象学という語を借りてきた先のフッサールは、この用語で、超越論的哲学へいたる途上に位置づけられる現象学的心理学のことを指していたという。これはもちろん超越論的なレヴェルでの議論である。そしてフッサールにとっては、内世界的なレヴェルでの生活世界の存在論は、その可能性が示唆されるに

とどまっていたにすぎないといえるようである(吉沢[1982:135-136])。このように自然的態度の構成的現象学を、超越論的な議論のなかに位置づけようとするフッサールに対して、シュッツは逆に、内世界的なレベルを議論の中心に据えようとする。

こうして、シュッツの自然的態度の構成的現象学がフッサールから大きくそれていくのは、間主観性という主題をめぐるのことになる。つまり、フッサールが超越論的な主体のレベルでの間主観性問題の解消をもくろんでいたのに対して、シュッツは、他者を所与として確保すること、つまり間主観性を自然的態度における所与としてみなすことを選ぶ。少なくとも間主観性という主題に関しては、超越論的な問題のたてかた自体を拒否するわけである。このように、シュッツの自然的態度の構成的現象学をフッサールの超越論的現象学から分かつのは、前者による、内世界的位相への「内属」(吉沢[1984:133-135])という試み、さらにいえば内世界的位相に定位しながらの超越論的分析から超越論「的」分析⁽³⁾への転換の試み、ということになろう。このことは、吉沢の言葉を借りれば、シュッツが「超越論的な問いを停止し社会的世界の精細な記述に向かったというだけにとどまらず、そうした存在論を展開することが逆に超越論の世界を基礎づけるのだ、その前提になっているのだという積極的な姿勢」を打ち出すことでもあったといえよう(吉沢[1984:133-135])。こうしてシュッツは「『生活世界の存在論』を自己の学的営為の中心におき、それを社会的世界における類型論として展開する」ことを主として試みるのである(吉沢[1982:134])⁽⁴⁾。

もちろんこうしたシュッツの立場は、フッサールの側からしてみれば、「他者存在を自明とした」という意味で超越論的方法の不徹底にほかならない(吉沢[1984:133-139])。にもかかわらず、それはシュッツの自然的態度の構成的現象学という立場において、超越論的な位相の議論が消滅してしまったということではない。確かにシュッツは間主観性問題に関しては超越論的な考察を拒否し、自然的態度における他者との共在を所与とした。しかし、内世界的な位相における、いうならば超越論「的」な探究は、シュッツの自然的態度の構成的現象学が主眼とする内世界的レベルでの、生活世界の存在論＝社会的世界の類型論、つまりいかなるものとして社会的世界が存在しているのかについての記述、という問題設定にとって、不可欠なのである。以下でみるように、それはシュッツにとっては、類型としての社会的世界がいかにして生成しうるのかという考察として現れる。

この間の事情をくむためにも、次章では、超越論「的」な位相と内世界的な位相がシュッツの社会理論のなかにどのように現れているかを検討することにしよう。

2. シュッツ社会理論における二つの系

本章では、前章でみてきたシュッツの自然的態度の構成的現象学に含まれる内世界的な位相と超越論「的」な位相とが、シュッツの社会理論のなかにどのようなかたちで現れているかを確認しておきたい。自然的態度の構成的現象学という立場が含むこの二つの位相は、シュッツの社会理論の編成のどの部分とつながっているのだろうか。シュッツの社会理論のどの部分にこれらの位相をみることができるのだろうか。

(1) 内世界的位相における探究——類型としての世界の記述

まず内世界的な位相での探究については、シュッツの次のような言葉が手がかりになる。

社会諸科学は、間主観性の哲学的諸側面を取り扱わねばならないのではなく、自然的態度をとる人びとにとって、つまり社会-文化的世界に生み込まれ、その世界のなかで自らの相対的位置を見だし、その世界に対処しなければならない人びとによって経験されるものとしての、生活世界の構造を取り扱わねばならない(Schutz[1959→1962: 144-145=1983:230])。

こうした社会科学の立場のことを、シュッツは同じ論文の結末部で「自然的態度の構成的現象学」と呼んでいる(Schutz[1959→1962:149=1983:235])。つまり、シュッツは、ここでは、自然的態度の構成的現象学の課題を、人々が世界をいかなるものとして経験しているのか、換言すれば、人々が生きている世界が、その当人たちにとっていかなるものとして現前しているのか、を明らかにすること、だと語るのである。

この課題は、「意味」の世界としての生活世界の構造を明らかにすることによって、とりあえずは遂行される。というのも、経験するとは意味を経験することにほかならず、それゆえ人々によって経験されるものとしての世界とは、意味的な世界にほかならないからである。そして、この意味的な世界経験とは、シュッツにおいては典型的な世界把握のこと——なにもものか「として」世界を把握すること——にほかならない。

だから、ここでいうシュッツの課題とは、まずもっては、人々がどのような意味のもとに世界を経験しているのかを記述すること、また人々の経験の多様性に関わっているこの世界の意味構造を記述することである。そしてさらには、この世界の意味構造の解明とは、人々が「世界をはじめから類型性という様態のもとで経験している」(Schutz[1954→1962:59=1983:123])がゆえに、世界が経験される様々な類型を記述するということにもほかならないのである。

つまり、内世界的な位相におけるシュッツの課題とは、＜人々が経験するものとしての世界の記述＞＝＜世界の意味構造の記述＞＝＜世界の類型論＞なのである。この意味で、前章で吉沢の言葉を借りて示唆したとおり、シュッツの自然的態度の構成的現象学の内世界的レベルの分析は、世界の「記述」であり「類型論」といいうるのである。

(2) 超越論「的」位相における探究——類型化の過程の分析

この一方で、自然的態度の構成的現象学の超越論「的」位相についてはどうだろうか。これに関しては、そもそもこの超越論「的」な分析が、何についてのものだったかを思い起こす必要がある。

前章で瞥見したように、自然的態度の構成的現象学の超越論的な位相は、もともと、『社会的世界の意味構成』の第2章の内的時間意識の検討のことを指していた。ではこの内的時間意識の分析はなんのために行われたのか。シュッツは『社会的世界の意味構成』のなかでは次のようにいう。「有意义的行為の分析は、こうして内的時間意識における体験の意味構成という問題に還元される。『意味』現象を徹底して、その起源において論述せんとする科学は、このような遡及作業を省略したままで済ますことはできない」(Schutz[1932=1982:58])。つまり内的時間意識の分析とは、体験の意味構成の問題、すなわち、いかにして意味が成立しうるか、を論じるものといえるだろう。

それでは、いったいシュッツのいう意味とは、いかにして成立しうるのか。この課題は「社会的世界の意味構成」以後も（超越論的現象学から距離をとりはじめながら）継続される。例えば、シュッツは次のようにいう。「意味とは、個々人の意識の流れの内部で生じる一定の体験に内在している特性ではなく、現在のいまから反省的な態度をもってとらえられる過去の体験を解釈した結果である」（Schutz[1945a→1962:210=1985:13]）。ここで強調されているのは、意味とは基本的に、事後的に反省的な視線のなかで確定されるものということである⁽⁵⁾。より一般的に言えば、意味とは「ある種の態度をもってとらえられる」ものであり、それはまさに「注意を向けること」にほかならない（Schutz[1932=1982:69]）。シュッツにとって、意味とは、あらためて注意を向けるという作用によって成立するのである。そして、シュッツは、こうした「注意を向けること」による意味の定式化の作用を、「類型化」として考察するのである（Schutz[1953c→1962:15-19=1983:64-68]）。

つまりシュッツの超越論的・超越論「的」な探究の線上にあるのは、＜内的時間意識の分析＞≡＜いかにして意味が成立しうるかの解明＞＝＜類型化のメカニズムの分析＞なのである⁽⁶⁾。そして、それゆえ、超越論「的」な分析とは、先述の内世界的な位相における記述対象であった、典型的に経験される世界の、その類型それ自体がいかにして構成されるのかを分析の課題としているといえるだろう。

（3）シュッツの社会理論における二つの系

ここまででわかるとおり、シュッツの社会理論のなかには、自然的態度の構成的現象という立場の含む二つの位相に対応した、二つの分析の系列がある。自然的態度の構成的現象学の内世界的位相に対応するのは、類型としての世界の記述であり、他方、超越論「的」な位相に対応するのが、この類型の構成についての分析としての類型化の過程の分析である。以下、シュッツの研究の具体例を挙げておこう。

類型としての世界の記述という系列を代表する、シュッツの研究といえば、例えば「よそ者」（Schutz[1944→1964:92-105=1991:133-151]）、「帰郷者」（Schutz[1945b→1964:106-119=1991:153-169]）、「見識ある市民」（Schutz[1946→1964:120-134=1991:71-189]）、「平等と社会的世界の意味構造」（Schutz[1957b→1964:226-273=1991:305-364]）という一連の論文を挙げることができるだろう。ここでは各々の詳細を逐一検討することはできないが、これらの論文では、いずれも、行為者にとっての世界経験の様相と諸行為者によって多様に類型化されうる世界の意味構造が論じられているとえる⁽⁷⁾。「よそ者」や「帰郷者」においては、移民や帰還兵の例をとって、新たな集団に加入したり変化を蒙った故郷へ戻ってきたりした当の行為者にとってたち現れてくるような、「関連性の体系」（Schutz[1945b→1964:108=1991:156]）と呼ばれる⁽⁸⁾、その集団の「相対的に自然な世界観」（Schutz[1944→1964:95=1991:138]）の構造が問題になっている。また、特に「見識ある市民」においては、この「相対的に自然な世界観」の構造が「知識の社会的配分」という観点から検討されている（Schutz[1946→1964:121=1991:172]）。「平等と社会的世界の意味構造」では、平等と差別という現象に焦点して、こうした世界観が含む「関連性領域の秩序」（Schutz[1957b→1964:242=1991:325]）が論じられている。関連性の体系については、次章でまた論じよう。

これに対して、類型化の過程の分析に対応する研究といえば、先程から繰り返し言及している『社会的世界の意味構成』の第2章、およびその成果をより内世界的なレベルと関連づけながら展開し（ようとして果たせず未完となつた）*Reflections on the Problem of Relevance*で論じられている関連性の（解釈的、主題的、動機的という）三重構造の議論を、まず挙げるべきだろう（Schutz[1970:53-74]）⁽⁹⁾。しかし、最も重要な論文は、この類型化という事態を、他者との身体的な協働的活動であるようなワーキングとして捉えた「シンボル・現実・社会」（Schutz[1955→1962:287-356=1985:113-204]）ということになるだろう⁽¹⁰⁾。ワーキングについても、次章でもう少し詳しく論じたい。

このように、シュッツの社会理論は、自然的態度の構成的現象学の二つの位相に対応した二つの系をもっている。しかし、注意すべきなのは、もちろんこれらの二つの系列が相互に独立であるわけではない、ということである。むしろ、シュッツの社会理論のなかでは、これらの二つの系列はお互いに絡まりあっている⁽¹¹⁾。ここでは、その例として、シュッツの行為論をみておこう。シュッツは、早い時期から、アクション（進行中の行為）とアクト（成果としての行為）を区別していた（Schutz[1953c→1962:19-20=1983:69],[1945a→1962:214=1985:17]）⁽¹²⁾。この区別の焦点は、アクションが遂行中の人間の活動であるのに対して、アクトは典型的には事後的に類型化された相での人間の活動であるということであり、それぞれ類型化のプロセスの分析と類型としての世界の記述という系に対応している。しかし、シュッツにとって、アクトとアクションの区別それ自体が重要であったわけではない。この区別は、「行為者がその行為に意味を結びつけるというヴェーバーの命題」を解明するために、ひいては行為の意味という事態を解明するためのものであった（Schutz[1932=1982:55]）。逆の言い方をすれば、シュッツは行為の意味という事態を、アクトとアクションの区別をとおして解明しようとしたのであり、この事態の解明に関してシュッツは両者を不可分なものとみなしているのである。

3. 関連性の体系とワーキング

前章では、シュッツの社会理論のなかに、自然的態度の構成的現象学の二つの位相に対応した、二つの絡み合った系——類型としての世界の記述と類型化の過程の分析——が見出されうることを確認してきた。さて、先述したように、類型としての世界の記述が「いかなるものとして世界が経験されているのか」を問い、また類型化の過程の分析が「いかにして世界は経験されているのか」を問うものであるならば、これらの二つの系が絡まり合ったシュッツの社会理論は、全体として「いかなるものとして」の世界が「いかにして」構築され、妥当されているのかを問うものに他ならない。そして、まさにこのような問いをたてるシュッツの立場をこそ、われわれは、自然的態度の構成的現象学と呼ぶのである。

とするならば、シュッツはいったい「どんな」世界が「どのように」構築・妥当されていると考えていたのだろうか。この問いに応えることが、自然的態度の構成的現象学という立場に基づくシュッツの社会理論の根幹的な洞察を明らかにすることにつながるだろう。

(1) 関連性の体系

シュッツにおいて「どんな」世界が構築・妥当されているのか、という問いに対して一概に具体的に応えることは難しい。というのも、前章でも瞥見したように、この問への応

え、つまり記述されるべき類型——経験される世界の姿——は研究の視角によっても対象の設定によっても多様でありうるからである。

しかしシュッツは、他方で、こうした多様な類型が、その場その場に時に応じて選びとられる、そのさいの枠組みを、「相対的に自然な世界観」であるところの関連性の体系として論じている。シュッツはこれを、固有内在的(intrinsic)関連性と賦課的(imposed)関連性とに分けて論じるのであるが、とくに後者は、あらゆる類型的な経験においてつねにその地平に保持されるもの——つまりある種普遍的な世界類型——として論じられてもおり、本節における「どんな」世界かという問いに対する端的なあるひとつの応えとなりうるだろう。まずは二つの関連性の区別を足がかりとしよう。

シュッツによれば、固有内在的な関連性とは、実践的に「選択された関心の結果」のことであり、ある行為者個人の見地からすれば、その都度その都度の彼の振る舞いにおいて、彼の関心をめぐってその度毎に編成されなすような世界経験のあり方である。つまりそれは、その都度の行為者の振る舞いにおいて編成し直される世界の意味構造のことである(Schutz[1946→1964:126=1991:179])。これは賦課的関連性を地平として成立する。

これに対して賦課的な関連性とは、「我々の選択した関心とは結びつきがなく、われわれの自由裁量による行為からは生まれない、そしてまさにあるがままに受け取られなければならない諸々の状況や出来事」のことであり、その都度その都度の世界編成を通じて、その地平に成立しつづけているような、その意味で普遍的な性格をもつ類型的に構造化された世界のことである(Schutz[1946→1964:126=1991:179])。シュッツは、もちろん世界の「分節化と組織化の形態」が実際に多様であることを認めつつも、賦課的な関連性は「人間の条件に根ざしている」がために「どんな社会的世界にも共通である」と述べている(Schutz[1957b→1964:229=1991:309])。

賦課的な関連性の体系の具体例について、シュッツは散発的に数箇所而言及しており(Schutz[1946→1964:126=1991:179-80],[1955→1962:329-356=1985:164-197],[1957b→1964:229-230=1991:309-310],[1970:167-182])、ヴァイトクスによる整理にしがえば、この賦課的関連性は、より普遍的な「根本的に賦課的な関連性」と、これに基礎づけられている「基本的に賦課的な関連性」に分けられるようである(Vaitkus[1991:94-95=1996:161])。ヴァイトクスは、シュッツの言説のなかにみられる、前者の例として、大地の存在、身体としての私の存在、内的時間・外的時間・身体的時間におけるリズムの存在を挙げ(Vaitkus[1991:113=1996:356], Schutz[1955→1962:329-330, 334-337=1985:164-165, 171-174],[1970:167-182])、後者の例としては、性別、年令集団、親族組織、支配-被支配関係などを挙げている(Vaitkus[1991:94-95=1996:161], Schutz[1955→1962:329-330=1985:166],[1957b→1964:229-230=1991:309-310])。

賦課的な関連性に関するシュッツのこうした主張は、もしかしたら過度の不当な普遍化を含むように、それゆえまた滑稽にさえ聞こえるかもしれない。ただここでは、シュッツのいう個々の賦課的関連性が、本当に普遍的なものでありうるのかどうかということは、——「どんな」という最初の問いにも関わらず——とりあえずはそれほど問題ではない。むしろ、シュッツが、賦課的な関連性ということによって、疑うことが無意味であるような世界観を示そうとしていたこと、このことに留目すべきであろう。シュッツが具体的にあげた——大地や身体といった——賦課的関連性は、通常は有意味な理由をもって疑うこ

とができないさまざまな事態の例示として読むべきだと思われる⁽¹³⁾。つまり、これは、「世界やそこにある諸々の対象が、彼に対して現れている以外のものであるかもしれないという疑念」を「停止」することによって、すなわち「自然的態度のエポケー」によって、自明視されているところのものの極限的な事例なのである (Schutz[1945a→1962:229=1985:37])。

それゆえ、このような、賦課的な関連性体系に関するシュッツの議論——疑いえない世界の姿の探究——が、「どんな」世界が構築・妥当されているかという問いに対するひとつの答え方になるはずである。もちろんそれは、先にも述べたように、その世界の具体的な描写であるよりは、地平としてあらゆる類型的な世界経験に通底する、そうした世界の存在についての主張と解すべきではあるのだが。類型的な世界経験は多様であり、この多様性について具体的に描写しきことは不可能である。その地平に、シュッツは、もっとも普遍的に自明的であると思われる世界を、賦課的な関連性としてみいだそうと試みていたのである。

(2) ワーキング

では、われわれは、上述のような特殊なエポケーを含む自然的態度において、いかにして世界を自明視し続けていくのだろうか。また同時に、そうした自明的な世界の賦課的な関連性という構造を地平として、いかにして個々の具体的な類型化を——賦課的な関連性というシュッツの語に対応させていうならば、固有内在的な関連性の編成を——行っていくのだろうか。つまり、われわれは「どのように」世界を構築し・妥当させつづけているのだろうか。この問いに関するシュッツの論議としては、彼のシンボル論、多元的現実論、我々関係論などを詳しく検討する必要があるだろう。しかしここでは、これらに通底する洞察として、シュッツのワーキングという概念を挙げることで、次善としたい。

さて、前節で論じたような地平としての賦課的な関連性のもとで、その都度編成される固有内在的関連性は、まさにその時その場所に応じて多様であり、それゆえそこに成立する類型的な世界把握、つまり現実も多様である。ワーキングとは、シュッツが、こうした現実の多様性に対して、諸現実の起源として要請する「至高の現実」である (Schutz[1945a→1962:226-227=1985:34])⁽¹⁴⁾。では、いかなる意味において、ワーキングは至高であるのか。シュッツはその理由を次のように述べなす。

(a) われわれは、夢をみている間ですら、それ自身外的な事物であるわれわれの身体によって、つねにその世界⁽¹⁵⁾に参加しているからであり、

(b) 外的諸対象は、いやしくもそれが克服されとしても、ただ努力によってのみ克服されるにすぎない抵抗を与えることによって、われわれの自由な行為の可能性を制限するからであり、

(c) その世界は、われわれが自分たちの身体的活動によって関与しうる領域であり、そしてそれゆえに、われわれが変化または変換しうる領域であるからであり、

(d) …この領域内でのみ、われわれはわれわれの仲間とコミュニケーションができ…「共通の了解環境」をうち立てうるからである (Schutz[1955→1962:342=1985:180])。

シュッツがここで述べているワーキングという事態を整理してみるならば、それは(a)身体として存在することで、(c)世界に対して働きかけると同時に、(b)世界から働きかけられ、(d)他者とのコミュニケーションが成立しているような事態ということになるだろう。つまり、ワーキングとは、<身体としての存在・運動>=<世界への／からの働きかけ>=<コミュニケーション>という事態のことなのである。

シュッツは、こうしたワーキングという身体的で運動的で協動的な活動を、あらゆる意味経験の起源に、すなわち類型としての世界把握の起源に、「至高の現実」として、みいだすのである。つまり、ワーキングが「至高」であるということは、典型的な世界経験に対して、その類型の産出運動——つまり類型化の運動——であるところのワーキングが先立つという意味においてなのである。それゆえ、いかにして世界が類型化されるのかという問いに対するシュッツの応えは、ワーキングつまり人間の身体的＝運動的＝協動的な活動によって、ということになるわけである。

さて、第1章で確認したように、シュッツの自然的態度の構成的現象学という立場を特徴づける中心的な点は（フッサールに比していえば）内世界的な位相への超越論的位相の従属、つまり、内世界的な位相における超越論「的」な探究の遂行ということであった。上述のように、ワーキングとは、この超越論「的」な探究としての類型化の分析において具体的に見出されたものである。とするならば、このワーキングという事態こそが、すなわち身体性・運動性・協動性の強調こそが、自然的態度の構成的現象学におけるもっとも中心的な洞察ということになるわけである。

また、つけ加えておけば、こうした人間の身体的＝運動的＝協動的な活動を、シュッツの議論の中核に見出すことは、たとえば、リンチが科学的行為について述べたような、シュッツの議論が社会と切り離された個人的な出来事としての人間行為しか取り扱っていないという批判(Lynch[1988])が、的外れであるということをはっきりと理解させてもくれる。確かにシュッツは、行論上、個人としての行為者の見地から話をはじめることが多いので、リンチのような誤解も理由のないものではない。しかし、シュッツの社会理論では、その論理構成上、人間の活動の身体性・運動性・協動性が、至高の現実として生活世界の基底に据えられているということ、このことは繰り返し強調しておきたい。

4. 結語

本稿では、自然的態度の構成的現象学という立場が内包する二つの位相を確認し、シュッツの社会理論においてその各々に対応する、類型としての世界記述の系と類型化の分析という系の存在を指摘してきた。前章でみたように、それぞれの系に具体的に対応するものとして、（賦課的な）関連性体系とワーキングという概念を取り出すことができる。

ただし、自然的態度の構成的現象学という立場が、たしかに二つの位相を内包していたにせよ、それは二つの立場であったわけではない。そして、第2章でも述べたことだが、シュッツの社会理論において、この二つの位相に対応する、二つの系もまた不可分であったはずである。たしかに、前章末尾で述べたように、自然的態度の構成的現象学という立場のもっとも中心的な洞察は、おそらくワーキングという事態というべきであろう。なぜなら、自然的態度の構成的現象学——これがもともとフッサールとの関係においてシュッツ自身の立場を規定した用語であったことを思い起こそう——を、フッサールの超越論的

現象学からまさに区別するための分水嶺こそが、内的世界における超越論「的」な探究という試みであったからである。しかし、ワーキングは、たんなる純粋な身体的な存在や運動として、それ自体で生起することは不可能である。そこにはつねに、ワーキングという類型化過程によって類型化された類型が織り込まれており、有意味な世界経験が伴わざるをえないのである。

それゆえ、自然的態度の構成的現象学という立場をもとにした、シュッツの社会理論の総体的な洞察とは次のようにいふべきであろう。身体的で運動的で協動的な類型化の過程のなかに、まさにその過程において類型化されたものが、賦課的な関連性という地平を伴う現実として（意味として、類型として、つまり経験された世界として）織り込まれ、その現実がまた類型化の過程をうながしている。シュッツは、あらゆる現実経験に通底する地平を関連性体系として示し、そうした関連性体系がつねに生起しつつある、身体的で運動的で協動的な類型化過程のことをワーキングと呼ぶのである。本稿は、シュッツの社会理論の重要な課題のひとつが、まさにこうした二つの系の絡まりあいの問題であることを示すところにやっとたどり着いたにすぎない。この先には、まだ長い道が残っている。

【註】

- (1) この用語が直接用いられている主要な文献は、私見では次の通り。Schutz 1932 = 1982 [1940 → 1962: 118-139 = 1983: 199-224] [1959 → 1964: 140-149 = 1983: 225-237]。
- (2) 本章の議論は、おもに〈吉沢[1982]〉および〈吉沢[1984]〉から筆者が当面必要な限りの情報を再構成したものである。それゆえフッサールおよび吉沢への誤解や曲解の責任はすべて筆者にあることはいうまでもない。
- (3) 本稿では、便宜上、フッサールの超越論的現象学に依拠しておこなわれたシュッツの分析を超越論的分析と呼び、内世界的位相への内属を強固に打ち出して以降のシュッツの分析を超越論「的」呼んで、両者を区別しておきたいと思う。これらの両者の間には、問題設定における連続性があると同時に、その応答の仕方に関して大きな転換があるといわざるを得ないからである。なを、シュッツの超越論的分析から超越論「的」分析への推移の簡略な年代的な後付けは Vaitkus [1991: 87-88 = 1996: 348-349] の註 (2) を参照のこと。
- (4) なぜシュッツは内世界的レヴェルへの内属という道を選んだのか、という問いに応えるためには、「社会的世界の意味構成」の段階では保留してある超越論的な主観性問題の解決の可能性を、のちには明確に否定するにいたる事情を詳細に検討する必要があるであろう。残念ながら本稿ではこの問題には言及しえない。フッサールとの関連でこの問題を考える際には、シュッツにおいては「自然的」という概念と「超越論的」という概念が二元的にのみ捉えられており、フッサールの超越論的意義が十分に捉えきられていない、という吉沢の指摘は重要な論点となるとと思われる(吉沢[1984: 133-135])。
- (5) ここで、特に「反省的」といわれているのは、シュッツが意味の問題を主として論じている行為の文脈では、行為者本人による自身の行為についての理解がまず第一に問題にされる傾向があるためである。それゆえ、「本人による」、「本人の」、「行為」の意味の理解という部分にこだわらずに「意味」一般についていうと、以下の本文のようになる。
- (6) もちろん、内的時間意識の分析をととして超越論的自我へまで遡って意味構成の問題を解明しようと試みる超越論的分析は、初期の「社会的世界の意味構成」においてのみみられるといつてよい。しかし、以降の分析においても、個人の意識には深入りすることはしないが、いかにして意味が成立するかという問題設定において連続性は明らかである。
- (7) もちろん、それ以外のことが論じられていないというわけではない。特に、類型としての世界観を論じるこれらの論文が、類型化の議論をまったく含んでいないということはありません。当然、類型化についての諸洞察は、これらの論文のなかにもみられるし、むしろ両者の関連が問題になっているとさえいえる。本稿では、この両者の絡まり具合についての詳細な検討に入り込むことができない。筆者にとっての今後の課題である。
- (8) 「関連性の等高線」(Schutz 1944 → 1964: 93 = 1991: 135) などとも呼ばれる。シュッツの「関連性」という語

の使い方は曖昧なところも多く何種類かに区別する必要がある。片桐や江原は、(a)行為者にとっての構造化された世界のあり方としての関連性と、(b)対象をそのものとして把握していく個人の意識過程メカニズムとしての関連性、(および(c)前二者の総称としての関連性)を区別している(江原[1985:108-140],片桐[1993:58-62])。ここで言及されているのは(a)である。また、この二者の区別それぞれ自体が、類型としての世界の記述の系と類型化のメカニズムの分析の系とにそれぞれ対応することをあわせて指摘しておく。

(9)シュッツにおける関連性(relevance)という語の多様性については、註(7)参照。ここで言及されているのは(b)に対応する。

(10)実際に、*Reflections on the Problem of Relevance*が構想されていたのは、1947年から1951年頃らしい(Schutz[1970:viii])。ちょうどこの時期を挟んで、シュッツは1945年に「多元的現実について」(Schutz[1945a→1962:207-259=1985:9-80])、1955年に「シンボル・現実・社会」(Schutz[1955→1962:287-356=1985:113-240])という二つの論文を書いているが、注目すべきは、この二つの論文の間に、シュッツのワーキングという概念のとらえ方がより深化しているということである。シュッツは1955年の論文では、ワーキングをはっきりと他者との協働的な、身体的活動として捉えている。いまのところ確証はないのだが、おそらくシュッツは、*Reflections on the Problem of Relevance*の構想中に、類型化という過程の分析に対する個人の意識からのアプローチの限界を知(り、その線での構想を留保す)るとともに、あらためてワーキングという概念の重要性と有効性を見出していったといえるのではないだろうか。なを、(*Reflections on the Problem of Relevance*に関しては言及していないが)「多元的現実について」および「シンボル・現実・社会」におけるワーキング概念に関しては、矢田部[1994b]にて論じたことがある(これは学会報告の元原稿として配布したもののだが、現在論文へ改稿中である)。

(11)この二つの系列については、矢田部[1995]にて論じた(これは学会報告の元原稿であり、現在改稿したものを発表準備中である)。そこではシュッツの行為論の用語を借りて、類型の記述の系をアクトの系列と、類型化の分析の系をアクションの系列と呼んだ。

(12)初期の著作においては、アクトは「行為成果(Handlung)の産出作用である経過中の行為(actio)」、アクションは「行為(Handeln)によって産出された既に構成済みの行為(actum)」とそれぞれ呼ばれている(Schutz[1932=1982:54])。

(13)シュッツの挙げた事例が妥当なものであるかどうかということ、またより重要なことには、疑いえない世界観といったものをこのような——列举という——仕方でも例示できるのかどうか、そしてそれが生産的な方向であるのかということ、こうしたことにはここでは残念ながら深入りできない。

(14)それゆえ、「至高の現実」という語における「現実」と多様な(多元的な)現実という際の「現実」とは、理論上異なったレベルに属していると考えるべきである。正直なところ、このあたりに関するシュッツの議論(ワーキング、至高の現実、多元的現実、生活世界、限定的意味領域などに関する議論)は錯綜している。これらの諸概念間の関係については、矢田部[1994b]において、またとくにワーキングと限定的意味領域の関係については矢田部[1995]においてある程度の整理と再構成を行ってある。

(15)「世界」とはここでは直接にはワーキング・ワールドのことを指している。ただし、ワーキング・ワールドとは、ワーキングが生起しているその場といった意味と解すべきであり、それを世界というのは多少ミスリーディングであろう。

【文献】

- 江原由美子 1985 『生活世界の社会学』,勁草書房。
 片桐雅隆 1993 『シュッツの社会学』,いなほ書房。
 Lynch, Michael 1988 "Alfred Schutz and the Sociology of Science", Embree, Lester ed., *Worldly Phenomenology: The Continuing Influence of Alfred Schutz on North American Human Science*, Center for Advanced Research in Phenomenology and University Press of America, 71-100.
 Schutz, Alfred 1932 *Der sinnhafte Aufbau der sozialen welt*, Springer-Verlag. → 1974 Suhrkamp. = 1982 佐藤嘉一訳,『社会的世界の意味構成』,木鐸社。
 ————— 1940 "Phenomenology and Social Sciences", Farber, Marvin (ed.) *Philosophical Essays in Memory of Edmund Husserl*, Harvard University Press. → 1962 *CP1*, pp.118-139. = 1983 渡部・那須・西原訳,『現象学と社会科学』,『著作集1』, pp.199-224。
 ————— 1944 "The Stranger: An Essay in Social Psychology", *The American Journal of Sociology*, Vol. XLIX, No. 6, May, pp.499-507. → 1964 *CP2*, pp.92-105. = 1991 渡部・那須・西原訳,『よそ者: 社会心理学の一試論』,『著作

- 集3] ,pp.133-151。
- 1945a "On Multiple Realities", *Philosophy and Phenomenological Research*, Vol.V, June. →1962 CP1, pp.207-259. =1985 渡部・那須・西原訳,「多元的現実について」,『著作集2』, pp.9-80。
- 1945b "The Homecoming", *The American Journal of Sociology*, Vol. L, No.4, December. →1964 CP2, pp.105-119. =1991 渡部・那須・西原訳,「帰郷者」,『著作集3』, pp. 153-169。
- 1946 "The Well-Informed Citizen: An Essay on the Social Distribution of Knowledge", *Social Research*, Vol. 13, No. 4 December. → 1964 CP2, pp. 120-134. =1991 渡部・那須・西原訳,「見識ある市民」,『著作集3』, pp. 171-189。
- 1953a "Edmund Husserl's Ideans, Volume II", *Philosophy and Phenomenological Research*, Vol. XIII, March → 1970 CP3, pp.15-39.
- 1953b "Phenomenology and the Foundations of the Social Sciences (Ideans, Volume III by Edmund Husserl)", *Philosophy and Phenomenological Research*, Vol. XIII, June →1970 CP3, pp.40-50.
- 1953c "Common-Sense and Scientific Interpretation of Human Action" *Philosophy and Phenomenological Research*, Vol.XIV, Sept. →1962 CP1, pp.3-47.=1983 渡部・那須・西原訳,「人間行為の常識的解釈と科学的解釈」,『著作集1』, pp.49-108。
- 1954 "Concept and Theory Formation in Social Science", *Journal of Philosophy*, Vol. LI, Apr. →1962 CP1, pp.47-66.=1983 渡部・那須・西原訳,「社会科学における概念構成と理論構成」,『著作集2』, pp.109-134。
- 1955 "Symbol Reality and Society", Bryson, Lyman et al.(eds.), *Symbols and Society: Fourteenth Symposium of the Conference on Science, Philosophy and Religion*, Harper. →1962 CP1, pp.287-356.=1985 渡部・那須・西原訳,「シンボル・現実・社会」,『著作集2』, pp.113-204。
- 1957a "Das Problem der transzendentalen Intersubjektivität bei Husserl", Gadamer, Hans-Georg & Kuhn, Helmut (eds.) *Philosophische Rundschau: Eine Vierteljahrsschrift für Philosophische Kritik*, Vol. V., → 1970 Kersten, Frederick (ed.) "The Problem of Transcendental Intersubjectivity in Husserl", CP3
- 1957b "Equality and the Meaning Structure of the Social World", Bryson, Lyman et al (eds.), *Aspects of Human Equality*, Harper & Brothers. →1964 CP2, pp. 226-273. =1991 渡部・那須・西原訳,「平等と社会的世界の意味構造」,『著作集3』, pp.305-364。
- 1959 "Husserl's Importance for the Social Sciences", *Edmund Husserl 1859-1959* (Phenomenologica 4), Martinus Nijhoff. → 1962 CP1, pp.140-149. = 1983 渡部・那須・西原訳,「社会科学に対するフッサールの重要性」,『著作集1』, pp.225-237。
- 1970 *Reflections on the Problem of Relevance*, Yale University Press.
- Schutz, Alfred & Gurwitsch, Aron 1985 *Alfred Schutz · Aron Gurwitsch: Briefwechsel 1939-1959*, Wilhelm Fink Verlag. =1987 Evans, Claud (trs.), *Schutz- Gurwitsch Correspondence 1939-1959*, Indiana University Press.
- 平 英美 1979 「A・シュッツと間主観性問題：フッサールの『デカルト的省察』に対する批判をめぐって」,『ソシオロジ』第24巻。
- 矢田部 圭介 1994a 「Working Worldと身体」,『現代社会理論研究』,第4号,現代社会理論研究会。
- 1994b 「A.シュッツの生活世界論の再構成：生活世界の「至高性」をめぐる一考察」,第67回日本社会学会一般研究報告(未公開)。
- 1995 「意味領域とワーキング：M.リンチによるA.シュッツの科学観批判を手がかりにして」,第68回日本社会学会一般研究報告(未公開)。
- 吉沢 夏子 1982 「A・シュッツにおけるフッサール哲学の意義：“自然的態度の構成的現象学”とは何か」,『哲学』第74巻,三田哲学会。
- 1984 「社会学と間主観性問題：“主観主義”批判・再考」,『社会学評論』138,日本社会学会。
- Vaitkus, Steven 1991 *How is Society Possible: Intersubjectivity and the Fiduciary Attitude as Problems of the Social Group in Mead, Gurwitsch, and Schutz*, Kluwer Academic Publishers. = 1996 西原・工藤・菅原・矢田部訳,「間主観性の社会学：ミード・グルビッチ・シュッツの現象学」,新泉社。

<省略表記>

- CP1=1962 Schutz, Alfred (ed. Natanson, M.), *Collected Papers 1: The Problem of Social Reality*, Martinus Nijhoff.
- CP2=1964 Schutz, Alfred (ed. Brodersen, Arvid), *Collected Papers 2: Studies in Social Theory*, Martinus Nijhoff.
- CP3=1970 Schutz, Alfred (ed. Schutz, L.), *Collected Papers 3: Studies in Phenomenological Philosophy*, Martinus Nijhoff.
- 『著作集1』=1983 渡部・那須・西原訳,『アルフレッド・シュッツ著作集 第1巻：社会的現実の問題Ⅰ』,マルジュ社。
- 『著作集2』=1985 渡部・那須・西原訳,『アルフレッド・シュッツ著作集 第2巻：社会的現実の問題Ⅱ』,マルジュ社。
- 『著作集3』=1991 渡部・那須・西原訳,『アルフレッド・シュッツ著作集 第3巻：社会理論の研究』,マルジュ社。